

過去世

岡本かの子

青空文庫

池は雨中の夕陽の加減で、水銀のやうに縁だけ盛り上つて光つた。池の胴を挟んでゐる杉木立と青蘆あしの洲すとは、両脇から錆さび込む腐蝕ふしよくのやうに黝くろずんで来た。

窓外のかういふ風景を背景にして、室内の食卓の世話をしてゐる女主人の姿は妖あやしく美しかつた。格幅かつぶくのいゝ身体に豊かに着こなした明石あかしの着物、面高おもだかで眼の大きい智的な顔も一色に紫が、つた栗色くりに見えた。古墳の中の空気をゼリーゼリーで凝こらして身につけてゐるやうだつた。室内でたつた一人の客の私は、もう灯ひをともしてもいゝ時分なのを、さうしないのは、今宵私を招いた趣旨ほたるの螢見物ほたるに何か関係があるのかも知れないと思ひ、すこしは薄気味

悪くも我慢して、勧められるまゝ晩餐ばんさんのコースを抄はかどらせて行つた。だん／＼募る夕闇の中に銀の食器と主客の装身具が、星座の星のやうに煌きらめいた。

女主人久隅雪子は私と女学校の同級生で、学校を卒業するとしばらく下町の親の家に居たことだけは判つたが、直ぐ消息を断つた。それから十年あまりして私は既に結婚してゐて、良人おととに連れられて外遊する船がナポリに着いた時、行き違ひに出て行かうとする船に乗り込む遽あわただしいかの女に、埠頭ふとうでばつたり出遭であつて、僅わずかにお互たがいに手を握つた。あとは私の帰朝後を待つてといひ残して訣わかれてしまつた。

二人ともいはゆる箱入娘で、女学生にしてもすでに知らねばな

らない生理的の智識に疎うといところがあり、よく師友から笑ひ者にされた。その代り二人は競つて難しい詩や哲学の書物を読んだ。さういつた関係から、双方無口であり極度の含羞はにかみやでありながら、何か黙照し合ふものがあるつもりで頼母たのもしく思つてゐた。だが私が四年目に帰朝し、それから二三年も経たつたのに、かの女からは再び何の消息もなく、同窓の誰も知らなかつた。一度こちらから親の家へ尋ね合した手紙は、久しく前に移転して住所不明の附箋ふせんで返されて来た。

ところが突然かの女は郊外の新居といふのから電話して来て、車を廻して寄越よこし、自宅で螢見物をさすといふのに、のん気な昔の友人訪問の気持を取り戻して、私は来て見たのであつた。

淡い甘さの澱粉質でんぷんの匂ひに、松脂まつやにと蘭花らんを混ぜたやうな熱带的な芳香ほうこうが私の鼻をうつた。女主人は女中から温まつた皿を取次いで私の前へ置いた。

「アテチヨコですの？」

「お好き？」

「えゝ。でも、レストランでなくて素人しろうとのおうちでかういふお料理珍しいと思ふわ」

「素人ぢやございませんわ。店の司厨長シエッフを呼び寄せて、みな下で作らして居ますのよ」

「わぎく、まあ、恐れ入りました」

「私、最近に下町で瀟洒しやうしやなレストラントを始めようと思つて、店や料理人を用意してありますのよ」

女主人はレモンの汁を私の皿の手前に絞つて呉れ、程よく食塩からしと辛子を落して呉れた。私は大きな松の実のやうな菜果を手探りで皮を一枚づゝ剥はぎ、剥げ根にちよつぽり塊かたまつてついてゐる果肉に薬味の汁をつけて、その滋味を前歯で刮かき取ることにこどものやうな興味を湧わかしながら、

「まあ、あなたがお料理屋を、どうして」

「——何かして紛らしてゐなければ——独身女はしじゆう焦いら々いらしますのよ」

さう云つて友はちよつと眉まゆを寄せたが、友の内心には何処どこかさとりめいた寛くつろいだ場所が出来、一脈の涼風が過か不及ふきゆうなしの往来をしてゐるらしくも感じられる。下手な情感的な態度を見せては案外友を煩うるさがらさぬともかぎらない。

「それよりも、私、私が今度買ひ取つて落着くやうになつたこの家に就いて不思議な因縁話があるの、あなたに聴いて頂かうと思つて……さう陽気な話ぢやありませんの。灯ひをつけて話しますわ」

夕顔の花のやうな照り色のシヤンデリヤがぼつとついた。室内の照明に負けて窓外の景色はたちまち幕を閉ぢて、雨の銀糸が黒い幕面にかすれた。一たん眼を冥つむつた友はまたぱつと開いて私の顔まともを真面まともに見た。これも昔見た友の癖である。

かの女は女学校を卒業して親の家で結婚前の生活をしてゐる期間に、望まれて父親の知合ひで郊外に隠寮を持つ退職官吏Yの家へ客分として預けられることになつた。

退職官吏Yの考へでは、自分の蒐集品の殊にこまかい細

工ものゝ昔人形や、壊れものゝ陶物の類は、骨董美術品商の娘

であるかの女の馴れて丹念な指先が、手入れ保存に適當だと思つ

たからであつた。かの女の父はまたかの女がたとへ富んだ老舗の

長女でも、下町の娘であるからには躰けに至らぬ我儘なところ

があらう。一度は上層智識階級の家へ入れて見習はしたいといふ

昔風の考へがあつた。雪子の父はなまじなよその夫人よりY家の主人を非常に厳格な躰け正しい人と信じてゐたから……

かの女はちよつとした嫁入支度ほどの調度を持つて、Yの隠察へ寄寓した。

あてがはれた庭向きの客座敷の隣の八畳へ調度を収めて、女らしい部屋にしてかの女は落着いた。家長のYは、かの女が落着くとすぐ部屋に兵児帯へこおびをちよつきり結びにした大兵だいひょうの体を唐突に運び入れて来て、衣桁いこうにかけた紅入りの着ものや、刺繡ししゅうをした鏡台の覆ひをまじくと見て、

「娘の子を一人持ったやうだ」

これが精一杯のお世辞の挨拶あいさつだといふやうに、ぶつきら棒に云つた。そして直ぐ椽えんから盆栽棚のたくさん並んでゐる庭へ下りて行つた。

その後はYは一度も部屋に見舞つて来なかつた。そしてとても仕切れないほどの所蔵品の手入れを命じたり、観賞するためあれこれと蔵から出し入れさせられて煩うるさかつた。彼は偏執症の蒐集慾以外に精力を使ふことを絶対に嫌つた。早く妻に訣わかれてからは、異性には全然関心を持たなかつた。それは彼の最も世の中では価値ありとする品とか気位とか伶俐りこうとかを誑きよう惑わくする魔性ましようのものに外ほかならなかつた。たゞ彼は気短かになつて、しばく癩かんし

癩やくを起した。それらの性癖の諸点が却かえつて彼を嚴格端正に表面化させたのだと雪子はYに就いての世評の裏を知つた。

何にでも極度に好き嫌ひをつけるYは、自分の息子兄弟にもそれをした。弟息子の梅うめ磨まろは父の唯一の寵ちやうじ児じだつた。彼はやゝ下しもぶく膨うりざねれの瓜ねが実が顔おの、こんもり高い鼻の根に迫らぬやう切れ目正しくついてゐる両眼の黒い瞳に、長い睫毛まつげを煙らせて、地を見入つてゐるときには、何を考へてゐるか誰も察しがつかなかつた。桐きりの花のやうに典雅でつくねんとした美しさが匂つた。声も鋭さをなめ驟なめして楽しい響きを持つてゐた。彼はいつでも不機嫌に近く黙

つて孤独で、地へ向けて長い睫毛を煙らせてゐた。雪子は新しく家族の仲間に加はつた自分に対し、若い女性に対し、何の影響をも示さないこの少年に、焦立たしさと、不満を含まないわけにはゆかなかつた。

だが、その美しさには雪子も呆然として息を吐いた。父は梅麿を自分の蒐集物の愛玩品の中に数へ、しかもその中で最も気に入つた一つのものゝやうに、書齋で、庭で、二人は大概一緒だつた。そして父はこの息子に下手からお世辞を使ふ態度を取つてゐた。梅麿は父がお世辞を使ふ気持を見抜いて、とぼけて悠々とお世辞を使はれてゐた。だが決して調子に乗らなかつた。そして、父が理由もなく癩癩を起しかけて来ると、少女より

やゝしつかりした綺麗きれいな唇を嬌然と笑みかけて、あどけないことを云つたり、親を煽おだてたり、他人の悪口を云つたり、およそ父の弱点が喜びさうなところを衝ついて、素知そしらぬ顔で父の気分を持ち直させることに、気敏けざとい幫間ほうかんのやうな妙を得てゐた。

雪子はいやらしいと思ふ以上に、その技巧の冴さえに驚嘆した。だが、梅麿は父以外にはその手は絶対に使はなかつた。

父の気紛れが、面白くない仕辛しづらい仕事を望むときには、梅麿はすーつと脇へ除よけた。夜中に急に風呂を沸かさせたり、椽えんの下の奥しまに蔵しまつてある重いものを取出さしたり——さういふときには兄の輛とも之助のすけが、ぶつ／＼いふ召使を困りながら指揮して、その衝しょうに當つた。

父はこのことを知つてゐて、

「梅は狡ずるいやつだ」

といつて笑つたが、その狡さが氣に入つてもゐた。

兄の鞆之助は反対に調法の外ほか、何から何まで、父の氣に入らなかつた。父は兄息子の顔を見るとむつと黙つて仕舞しまふか、癩癩を浴せかけた。命令通り出来上つた仕事も、その命令通りにした愚直なことが、そこに叱言こごとの隙間すきまもないことで父を怒らせた。兄はしじゅうおどくしてゐて、眼鼻立ちに神経の疲労と愁うれひの湿りがあつた。濃い頭の捲毛まきげだけが兄弟似寄つてゐた。兄弟は父が現代教育の方針に不満といふ理由で、一人は中学を、一人は高等学校を、途中から退学させられて、通つて来る二三人の家庭教師に

つかされてゐるが、実は父が家庭に於ける享樂生活に手不足を来すのを、父は極力嫌つたためでもあつた。

兄の鞆之助は雪子の部屋へよく遊びに来た。雪子が部屋の周圍に、蔵から出して来た、真もの、植物以上に生々と浮き出てゐる草花が染付けられてゐる鉄辰砂の水差や、掌の中に握り隠せるほどの大きさの中に、恋も、嘆きも、男女の媚態も大まかに現はれてゐる芥子人形や、徳川三百年の風流の生粧が、毛筋で突いたやうな柳と白鷺の池水に彫み込まれた後藤派の目貫きのやうなものも並べて、自分の店から持つて来たいろ／＼の専門の道具や薬品を使つて手入れしながら、面倒臭く思つて伸びをしたり、または芸術といふ不思議な幻術が牽き入れる物憎い恍惚に浸つ

たりしてゐると兄はおづ／＼入つて来る。

彼はかの女の傍に立たて膝ひざして坐すわると、いくらか手入れを手伝ひながら、かの女の気配を計つた。かの女の丸い顔をいぢらしさうに見た。

「うちは、これでね、思つたほど豊かぢやないんですよ。何しろ父はあゝいふ風でせう。何でも見付け次第買つちまつて、とき／＼月末の生活費の払ひの現金にも困ることがあるんです」

かの女は興味索然としながら話に釣り込まれた。

「あなた方ご兄弟は将来どうするお積り」

「父が生きてゐるうちは今の財産を使つちまつても、父の恩給で米代ぐらゐはありますが、父が死んだらこんな道具類でもぽつ／

「売つて喰つて行くより手はありません。それにしても贖物にせものが多くて」

「持参金付きのお嫁さんでもお貰もらひになつたらいかゞ。ご兄弟とも美男子だしお家柄はよし」

かの女は擲揄からかつた。軻之助は真まに受けた。

「だめですよ。第一僕等に学歴はなし、それにかう見えて、僕は女に対してうんと贅ぜいたく沢たくな好みを持つてゐるんです」

「弟さんは」

「あれは父と同じに女嫌ひらしいです」

さうかと思ふとまたの日は急に朗らかで、いそ／＼して来て、どこから探し出して来たか、古風な猥みだらな絵巻物をかの女にそつ

と拵げかけるやうなこともあつた。かの女は極力平静を装つて、彼の顔を正視した。

「それが面白いのでございます」
すると、彼は照れて、

「僕にはものを考へないといふモットー以外には生きる方法はな
いんです。単に刹那せつな々々の刺戟しげきのほかには……」
と負け惜しみのやうなことを云ひながら、手持ち不沙汰ぶさたにそれを
巻き納めて部屋を出て行くのだつた。

父のYは旧幕の権臣の家の後嗣者こうしであつた。旧藩閥の明治の功

傑たちは、新政府に従順だつた幕府方の旧権臣の家門を犒ねぎらふ意味から、その後嗣者を官吏として取り立てた。Yは相当なところまで出世した。しかし、Yの持つて生れた度外れの氣位と我がしゆう執しゆうの性質から、たうとう長ちやうじやう上じやうと衝突して途中で辞めて仕舞しまつた。遺産のあるまゝに生来の蒐しゆう集しゆう癖へきに耽ふけつて、まだ壯年をちよつと過ぎたくらゐの年頃を我わが儘ま三昧さんまいに暮さうと決めてしまつた。恐るべきエゴイストの墓標のやうな人間であつた。

Yの権けん高たかな氣風と、徹底した利己主義に、雪子はやゝ超人的な崇高な感じは受けたが、下町娘の持つにんきやう仁にん侠ぎやう的な志氣はYにひどい反抗と憎みを持つた。あはよくば、Yが寵ちやうあい愛あいしてゐる弟息子を奪つて、父の傲慢ごうまんの鼻を明かしてやらうとさへヒステ

リカルに感じた。

兄の息子は、膨れ目蓋まぶたのしじゅう涙ぐんでゐるやうに見える、皮膚の水つぽい青年だつた。女のこと一度落度おちどがあつたといふ噂うわさだが、しかしそのことが原因ばかりでもない蔭の人の性分を十分持つてゐて、父や弟から、身内と召使ひとの中間の人間に扱はれ、雇人やといにんに混つて、自然にこの別寮の家扶かふのやうな役廻りになつてゐた。しかし、見かけほど悲劇的な性格もなく、どこかの^{おろか}ん気で愚おろかなところがあつて、情操じやうさう的てきなものを突き詰めては考へられなく、萍うきくさの浮いたところがあつた。

母のゐないこの別寮で、兄の鞆之助は主婦のやうな役目にもなつた。雪子が来て二月ほどしたある日、弟の梅麿はかの女の部屋に来てゐた兄のところへ珍しく入つて来て、

「兄さん、僕に出して呉れた着物、綻びが切れてるぢやないか」と袂たもとをあげて脇を見せた。

すると兄ははらくししながら、美しく重圧して来る弟の黒い瞳に堪へないやうに眼を伏せて目蓋まぶたをぴりりさせ、

「だつて、いま、婆ばあやも女中も使ひに出しちやつてゐないんだから仕方がないよ」

すると梅麿は苦いものに内部から体を縊よぢ廻されるやうに憂鬱ゆううつな苦惱を表情に見せて、

「もう浴衣ゆかたでなきや暑くて、お父さんにいひつかつた庭の盆栽へ水をやりに行けないぢやないか——兄さん自分で縫つてお呉くれよ」

兄あにの不ふ甲が斐いない性質せいしやうに対する日頃ひぐらの不ふ満まんと、この弟ていを凝こつた瑩えい
いぎよく玉たまのやうに美しくしてゐる生れ付き表現ひょうげんの途みちを知らない情熱じやうねつと、生命力せいめいりきの弱いものに対しては肉親にくしんでも奴隸どれいのやうに虐しいたげて使つかつてしまふ親譲しんじやうりのエゴイズムとが、異様いさぎよくで横暴ごうぼうな形かたちを採とつて兄あにに迫おそつた。

兄あには困こまつたやうな情じやうけけないやうな表情へいしやうをして、突つき付つけられた浴衣ゆかたに近寄ちかつて行いつた。

しかし、傍わがはに雪子ゆきこのあるのを見みると、薄うすい乾かわいた下唇かみづちをちよつと舌したの先さきで湿しらしてから、兄あにはにやりと笑わらつた。

「無理をいふなよ——だめだよ。男になんか、縫へなんて……」
そして腕組みをして昂然こうぜんとした態度を作つた。それには不自然なところがあつた。兄はありたけの勇を揮ふるつて弟の瞳こころに睨にらみ合つた。

雪子の立場が切ないものになつて来た。雪子は彼女の箆筒たんすの観音開きから急いで針道具を取出して来て、弟の持つてゐる浴衣に手をかけた。

「何でもありませんわ。あたし縫つてあげますわ」
すると、梅麿は浴衣を雪子の手からすつと外はづして、なほ兄に向つていつた。

「兄さん縫つてお呉れよ。いつもうまく縫ふぢやないか」

兄は赤くなつた。弟は兄になほも迫つた。場合によつては平気で、兄が雪子に聞かれて、もつと顔を赤くしさうな暴露の意地悪さを用意して、ぜひ兄に縫はせないでは置かない気配を示した。そこにはまた、雪子といふ第三者が入り込むのを潔癖けつぺきに嫌ふいこぢさもあつた。

雪子は弟が肉親の兄に対する執拗しつような残忍な仕打ちと、また女の身の雪子が折角せつかくの申出もうしでを態ていよく拒否された恥とで、心中怒りが盛り上つて来た。何として仕返しをしてやらう——雪子は針道具をそこへ置いたまゝ、青葉の映る椽側えんがわへ離れて行つて、その柱へ凭もたれてまじくと弟を見詰めてゐてやつた。

兄は雪子の気配を察するだけに、いよ／＼その場の処置が困難

になつて、ただ生返事なまをして萎縮いしゆくしてゐた。

雪子はふと、母もなく我執の父の下に育つて、情のしこつた弟息子の親への甘えどころが、兄へかうも變つた形を採つて現はれるのではないかと気がついた。そして、生命力の薄い、物に浮うかれ易やすい兄は、到底弟のこの本能の一徹な慾求を理解もし負担もしてやる力はないのだと思つた。兄は彼の紛らし易やすい性分から、彼の愛の慾求を何かに振り撒まき、繋つなぐことによつて、彼自身だけの始末をつけてゐた。彼はこの頃いよく雪子に向けて心を寄せる傾向が見えてゐた。

兄は雪子の眼の前で針仕事をする姿を、何としても見せたくないらしく、いかに弟に迫られても薄笑ひしてゐて、応じなかつた。

そして顔色を蒼あおざめさしたり、急に赤めたり、しかもわきへ避けて行かないで、だん／＼眼と口とが茫ぼう漠ぼくとなるところを見ると、一種の被虐性の恍こう惚ぼつに入つてゐるものゝやうに見えた。

弟はこれに対してますます／＼執しつ拗ようになり、果ては凡あゆる侮ぶ誣ふの言葉を突きつけて兄に向つた。

雪子は見ではゐられない気がした。こんなに執拗しつように取組まなければ愛情の吐け口を得られない兄弟の運命や性格の原因をどこへ持つて行つたらいか、その詮せん索さくをするのさへいま／＼しいほど、心を不快に底から攪かき廻まされた。いまから考へると多分の嫉し妬ともあつたやうに思ふ。さういふ険けわしい石火いしびを截きり合つて、その裂目さけめから汲くまれる案外甘い情感の滴り——その嗜慾しよくに雪子は魅

惑を感じた。雪子の細胞には、他人のさういふ仕打ちの底の心理を察して羨むだけの旧家育ちの人間によくある、加虐性も被虐性も織り込まれてゐた。

弟はたうとう兄の薄皮の手首を、女のやうにじーつと抓つた。

兄は真赤に顔を歪めてそれを堪へてゐた。雪子は激動の極、少し痴呆状態になつて却つて逆に刺戟を求めるところから、もつと眼の前で惨劇の進むのに息詰まる興味を持つやうになつてゐた。

それが終ると弟は浴衣を抛り出して、手早く帯を解いて、それから着てゐた袷も脱いだ。

「僕、縫つて呉れないなら、裸で庭へ出て行くから——」
行きかける風さへみせた。

兄はあわてゝ弟を捉へた。

「だめだよ。そんななりで、君、感冒をひくぢやないか」

兄は弟が小さい時感冒から肋膜ろくまくの氣になつたのを覚えてゐて、それを氣遣つたものゝ、もつと大きな原因は、この兄弟は生まれつき肉体の露出については不思議な羞恥しゆうちの本能を持つてゐた。

他人に見られるやうなところで、どんな必要の場合でも肌を脱いだり、裾すそをからげたりは決してしなかつた。兄弟同志の間では、なほ更それは猥みだらかなものを見るやうに嫌つた。

いま弟がそれを敢あえてするのは、必死の羞恥を突き付けて、兄に

必死の決意を促す最後の脅迫手段だつた。

「君、裸を垣根から通る人に見られるぢやないか」

「かまふもんか」

兄弟は死のやうに蒼あおざめて争つた。

兄は息が切れるやうに喘あえいだ。眼を伏せて、なるべく見ないやうにして、着物を弟に着せようとした。弟は肩ではねのけた。幾度か少青年の白磁色の身体が紺こん豎たて縞しまの大島の着物に覆はれては剥むけ出た。兄はその所作の間に、しばしば雪子の方を振り向いてかの女の気配うかがを窺つた。

兄の気持を察すると、弟の童貞で魅惑的な肉体を、自分が心を寄せかけてゐる若い娘に見られることは嫉ねたましく厭いとはしかつた。

だが我意を貫くこと、兄を脅すことの一閃に耽る弟は、今は全く雪子の存在などは無視した。弟は一体ふだんから雪子の存在をどう考へてゐるのか、女といふものに対してどういふ感受性を持つてゐるのか、全く不明だつた。それは雪子を寂しく焦立たしいものにしたが、この場合、彼が何人なんびとに対しても嫌ふ裸身を雪子の前ですらりと現はすといふことは、たとへその目的は兄に向つてあるとはいへ、副作用として雪子は無視の軽蔑けいべつを斜はすに受けないわけにはゆかなかつた。だが、こゝに至つて雪子は怒らうと思つてもなぜか力が脱けた。

雪子を女として少しも顧慮されない自分を、急に魅力のない卑しいものに感じて、弟に対して感じてゐるふだんの心の底の寂し

さを一層深めた。

「仕方がないやつだなあ」

兄はたうとう負けて、雪子がそこへ置いて来た針道具を、ちよつとかの女に会えしやく釈して、手元へ引き寄せた。針さしから手頃の針を抜き取り、針先を頭の髪の毛へ突き込んで油をにじませた。アイヌの郷土細工の糸巻から、弟の着物と似合ひの色糸を見付けて、針の孔めどへ通した。それからいかにも物馴ものなれた調子で綻ほころびを繕つくろひにかゝつた。

男の針仕事——。いかにぎこちなく、佗わびしい形でそれが行はれることだらう。雪子はあらかじめぞりつと寒気を催すと共に、その不快な醜さによつてかの女の神経の肌質きめをさゝくれ立たされる

ことを覚悟してゐたが、兄の手振りを見ておや／＼と思つて安心した。より以上に感心した。それは女のする通りの所作に違ひないが、しかしその通りを男の青年がするのには、少しも男の格を崩し、また男の品位を塩垂れさすやうな女々しい窪みは見出せなかつた。従容しようようとして、たゞ優しい仕事に、男がいたはり携たずさはつてゐる自然の姿に外ほかならなかつた。結局、兄の性格としてそれは身についた仕事であり、弟へしてやつてゐる平常からの馴なれであり、実は好みの就業となつてゐるのかも知れない。

「男の針仕事もいゝものだ」

と、雪子は胸の中でさう嘆声を漏もらしてゐた。

だが、雪子は羞明まばゆいのを犯して、兄の縫ふ傍に立つてゐる弟の

裸身に眼をやると同時に、全面的に雪子に向つて撞き入らうとする魅惑を防禦して、かの女の筋肉の全細胞は一たん必死に収斂した。すぐ堪へ切れない内応者があつて、細胞はまた一時に爆発した。そしてすっかり困迷して痴呆状態に陥つた雪子の心身へ、若く甘い魅惑は水の如く浸り込んだ。

雪子はこの若きダビデの姿をいかに語らう——ミケランヂエロの若きダビデの彫像の写真にしても、このときまだ雪子は知らない。後に歐洲の彷徨の旅で知つたのである。それは伊太利フロレンスの美術館の半円周の褐色の嵌め壁を背景にして立つてゐた。それが持つ憂愁の甘美は、西洋的の動物質と東洋的の植物性との違ひはあるが、梅麿が持つものとはほとんど同じだつた——。

健かな肉付きは、胸、背中から下腹部、腰、胴へと締しまつて行き、
こどもの豹ひょうを見るやうだつた。流りゅう暢ちやうで構梁たしの慥たしかな肩の頂面
に、つんもり扇形の肉が首の附根の背後へ上り、そこから青白く
微紅を帯びた頸くびが擡もたげられた。

だが、雪子の魅みせられたのはさういふ一々のものではない。何
代か封建制度の下に凝り固めた情熱を、明治、大正になつてまだ
点火されず、若もし点火されたら恨うらみの色を帯びた妖よう艶えんな焰ほのおとな
つて燃えさうな、全部白臘で作つたやうな脂肉のいろ光沢つやだつた。
それにはまた喰くひ込まれてゐる白金の繩を感じた。

久隅雪子はほたる見物にことよせて私を招き、文学者である私にだけは是非この話をして、自分のこの家に落着く気持を分担して貰ひ度いのだつた。この家はその奇矯な親子兄弟の棲んでゐた家だつた。雪子は話し終つて、ほつとして云つた。

「その父親が病死すると直きでしたの、その兄弟が心中しちまつたのは……」

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成10 岡本かの子」国書刊行会

1992（平成4）年1月23日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第三卷 小説」冬樹社

1974（昭和49）年4月30日

初出：「文芸」

1937（昭和12）年7月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：湯地光弘

2016年1月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

過去世

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>